

推測する眼と芸術表現

—崩壊のサインとしてのひび割れに注目して—

高木 咲織（東京大学大学院）

S.K.ランガーは、芸術作品を現実と同様に見ることを、「我々に対象を把握させるシンボルと、我々にそれが意味する対象に対処させるサインとの混同」であると非難した。確かに、芸術作品はある性質や感情そのものの形式を体験させるところにその特異性があり、現実の行動を惹き起こすサインとは区別すべきである。しかし、芸術作品として絵画を鑑賞する眼とサインを読みとる眼には共通点もある。

ある物体に入った「ひび割れ」は、その物体が崩壊へと進んでいることを示すサインである。本発表では、絵画に描かれた「ひび割れ」がどのように読みとられるかを考察し、それを実践的生活における読みとられ方と比較することで、共通点を明らかにしたうえで、改めて「芸術を見る眼」の条件付けを行う。

まず、実践的生活におけるひび割れの読みとられ方を、インフラ補修の技術者の例から考える。実践的な眼は、ひび割れの原因・結果を推測し、取るべき行為によってカテゴライズする。それによってひび割れは記号としての役目を終え、消費される。

次に、絵画内に再現されたモチーフのひび割れが、どのように絵画の表現に関わっているかを、H.ロベールの廃墟画についての D.デイドロの言説に基づいて、三木順子の解釈する M.イムダールのイコニック理論を参照しつつ考える。絵画に再現された世界においてのひび割れの原因・結果を推測することは、絵を見る視線を活性化し、絵にコンポジションを打ち立てることに寄与する。コンポジションは絵画を見るという体験に「瞬間的な生動性」を与え、主題を必然的なプロセスとして呈示する。このとき、ひび割れは記号として消費されず、その内容を客観的に固定できない、体験そのものとしての意味の生成に関わる。

このように、サインを読みとる眼と絵画を見る眼は、因果を推測する働きまでは共通するが、その記号をカテゴライズし消費するか、コンポジションの打ち立てに従属させるかで相異なる。そして二種類の眼の異同を知ることは、絵画が実際に持つサイン（経年によるひび割れなど）が、その絵画の鑑賞に影響を与えることを肯定的に捉える理論を準備する。

参考文献

S.K.ランガー『シンボルの哲学』塚本明子訳、岩波書店、2020

Denis Diderot “Ruines et paysages ; Salon de 1767” Hermann, 2004

三木順子『形象という経験—絵画・意味・解釈—』勁草書房、2002 他